武蔵野日曜聖書講筵

生命がけの伝道―パウロ第一回伝道後半―

――使徒行伝第14章――

１９９１年９月29日
小池辰雄

徴と不思議　生まれながらの跛者を癒す　御利益信仰ではないぞ　みんな上から来ている　霊的要素と自然現象　パウロ石撃ちにあう

【使徒14】

1二人はイコニオムにて相共にユダヤ人の会堂に入りて語りたれば、之に由りてユダヤ人およびギリシヤ人あまた信じたり。2然るに従わぬユダヤ人ら異邦人を唆し、兄弟たちに対して悪意を懐かしむ。3二人は久しく留まり、主によりて臆せずして語り、主は彼らの手により、徴と不思議とを行いて恵みの御言を証したもう。4ここに町の人々、相分かれて或者はユダヤ人に党し、或者は使徒たちに党せり。5異邦人、ユダヤ人および其の司ら相共に使徒たちを辱しめ、石にて撃たんと企てしに、6彼ら悟りてルカオニヤの町なるルステラ、デルベ及びその辺の地にのがれ、7彼処にて福音を宣伝う。

8ルステラに足弱き人ありて坐しいたり、生まれながらの跛者にてかつて歩みたる事なし。9この人パウロの語るを聴きいたるが、パウロ之に目をとめ、救わるべき信仰あるを見て、10大声に『なんじの足にて真直に起て』と言いたれば、かれ躍り上りて歩めり。11群衆、パウロの為ししことを見て声を揚げ、ルカオニヤの国語にて『神たち人の形をかりて我らに降り給えり』と言い、12バルナバをゼウスと称え、パウロを宗と語る人なる故にヘルメスと称う。13而して町の外なるゼウスの宮の祭司、数匹の牛と花飾とを門の前に携えきたりて群衆とともに犠牲を献げんとせり。14使徒たち、即ちバルナバとパウロと之を聞きて己が衣をさき群衆のなかに馳せ入り、15呼ばわりて言う『人々よ、なんぞかかる事をなすか、我らも汝らと同じ情を有てる人なり、汝らに福音を宣べてかかる虚しき者より離れ、天と地と海とその中にある有らゆる物とを造り給いし活ける神に帰らしめんと為るなり。16過ぎし時代には神、すべての国人の己が道々を歩むに任せ給いしかど、17また自己を証し給わざりし事なし。即ち善き事をなし、天より雨を賜い、豊穣の時をあたえ、食物と歓喜とをもて汝らの心を満ち足らわせ給いしなり』18斯く言いて辛うじて

群衆の已らに犠牲を献げんとするを止めたり。
19然るに数人のユダヤ人、アンテオケ及びイコニオムより来り、群衆を勧め、
而してパウロを石にて撃ち、既に死にたりと思いて町の外に曳き出せり。
20弟子たち之を立囲みいたるに、パウロ起きて町に入る。明くる日バルナバ
と共にデルベに出で往き、21その町に福音を宣伝え、多くの人を弟子として後、
ルステラ、イコニオム、アンテオケに還り、22弟子たちの心を堅うし信仰に
止らんことを勧め、また我らが多くの艱難を歴て神の国に入るべきことを教
う。23また教会毎に長老をえらび、断食して祈り、弟子たちを其の信ずる所
の主に委ぬ。24斯てピシデヤを経てパンフリヤに到り、25ペルガにて御言を語
りて後アタリヤに下り、26彼処より船出して、その成し果てたる務のために
神の恵みに委ねられし処なるアンテオケに往けり。27既に到りて教会の人々
を集めたれば、神が已らと偕に在して成し給いし凡てのこと並びに信仰の門
を異邦人にひらき給いしことを述ぶ。28斯て久しく留まりて弟子たちと偕に
いたり。

●徴と不思議

今日は、使徒行伝の第14章です。第一回伝道の後半。パウロは、何も第一回に限らず、どの伝道も生命がけですけれども。もう大変なものです。我々のなんかは、「伝道」なんては言えない。

1二人はイコニオムにて相共にユダヤ人の会堂に入りて語りたれば、

「イコニオム」はルカオニヤという地方の中心みたいな所です。「二人」は、もちろんパウロとバルナバです。「会堂」はシナゴーグです。キリストもカペルナウムのシナゴーグで話をされた。

之に由りてユダヤ人およびギリシヤ人あまた信じたり。

ユダヤ人はもちろん地方に散っていますから、「ディアスポラ」というんですが、その散っているユダヤ人、それからギリシヤ語を語るご連中。しかし、異邦人の方が、ギリシヤ人の方が多いわけです。

2然るに従わぬユダヤ人ら異邦人を唆し、

パウロの言うことは、ユダヤ教と違うものだから、それですぐ、食ってかかるですね。

兄弟たちに対して悪意を懐かしむ。

福音を語るところの兄弟ですね。パウロは、しかし、このユダヤ人のためには、「自分はキリストに棄てられても」と言って、伝道しているわけです。

3二人は久しく留まり、主によりて臆せずして語り、主は彼らの手により、
徴と不思議とを行いて恵みの御言を証したもう。

パウロとバルナバは、このイコニオムに留まって、しょうがない敵対する奴が居ても、退かないわけです。「主によりて臆せずして語り」の、この「よりて」という言い方が、ここのところでは特別な言い方をしている。

「主さまに乗っかって」

というような言い方です。「アポン・ザ・ロード」。

「主と本当に一つとなって、キリストが土台だから」

と、そういう意味でしょうね。「臆せずして語り」と、それはもう、臆していたら何も語れない。福音の世界は、聖霊の権威ですから、もちろん臆しない。「徴」というギリシャ語は「セイメイオン」、「不思議」は「テラタ」という。即ち、言葉を裏付けするものが、「徴と不思議」なんだ。普通の常識では考えられない、力ある不思議を行う。だから、病が癒えたり、いろいろするわけだ。気のおかしなやつが治ったりね。

ヘブル書2章4節に、

「神また徴と不思議と、さまざまの能力ある業（わざ）と、御旨（みむね）のままに分ち与うる聖霊とをもて証を加えたまえり。」（ヘブル2・4）

なんてことが書いてある、非常にはっきりと。「カリスマ」と「カリス」ですね、これは。キリストの霊が無いところでは、こういう事が起きないです、旧約では滅多に。預言者はやりましたけれども、エホバの霊で。ところが、キリスト教界で、こういう「徴と不思議」が起こっている人は非常に少ない。カトリックの神父にはやる人が時たまいます。プロテスタントの方は少ないね、それが。理屈が多いらしい。

ゲーテの、

『ディヒト・ウント・ヴァールハイト』(Dicht und Wahrheit)

という自叙伝があるけれども――これは全部は書かないんです、若い時の自叙伝で、小説ではないです――その第16巻の終りの方に、ゲーテという人はやっぱり凄いよ、

「キリスト教の初代、使徒たちが、本当にキリストの霊で動いていた時の、その新鮮さとその力強さ、これは本当に凄い。実は、ここにキリスト教の大事な本質があるのに、今はどうだ」

と。ツィンツェンドルフ（ニコラウス・ルートビッヒ・フォン・ツィンツェンドルフ1700～1760　キリスト教神学者）というゲーテの少し前の人で、かなり聖霊の力で働いていた人がある。このツィンツェンドルフのご連中は「兄弟団」「ブルーダー・ゲマインデ」というんですが、

「この兄弟団の人たちがそれを或る意味において継いでいるんだ」

ということをゲーテが言っている。ツィンツェンドルフの「兄弟団」や「ピエティステン」を――いわゆる「ピューリタン」ではないです、イギリスの「ピューリタン」とは違う――それを非常に評価している。ゲーテという人はちゃんと見るべきものははっきり見てい

る人で、彼自身、異言の体験もある。一般のクリスチャンはゲーテの素晴らしさが分からないです、殊に無教会は。藤井先生も、

「ゲーテには気をつけろ」

なんて言っているんだから。そういうことで、

「我々はどこまでも使徒的信仰の質で行かなければいかん」

ということを、その点で言っている。「徴と不思議」が自然に現れるわけです。内村鑑三、藤井武、塚本虎二は、「徴と不思議」が現れなかったからね、無教会では。それは、手島さんと私を通して新しい事が始まったんだよ、正直ね。

●生まれながらの跛者を癒す

4ここに町の人々、相分かれて或者はユダヤ人に党(くみ)し、或者は使徒たちに党せり。

はっきり分かれる。一の宮で特別な集会をやった時に――独協の学生達です――分かれてしまったです、やっぱり。いわゆる教会的なものに戻ってしまうのと、

「これだっ」

と言ってぶつかって来たのと。そういうように、本ものと分かれる。手島さんが教会で話すると、教会が割れてしまうんですよ。これもその通りで、旧態依然の、

「これはおかしい」

なんて言って止めるやつと分かれる。だから、聖霊を受けると、「これだっ」と言うわけでパウロの方に寄って来たわけだ。

5異邦人、ユダヤ人および其の司ら相共に使徒たちを辱(はずか)しめ、石にて撃たんと企てしに、6彼ら悟りてルカオニヤの町なるルステラ、デルベ及びその辺(あたり)の地にのがれ、7彼処にて福音を宣伝(のべつた)う。

危ないから、そこから逃れた。

8ルステラに足弱き人ありて坐しいたり、生まれながらの跛者(あしなえ)にてかつて歩みたる事なし。9この人パウロの語るを聴きいたるが、パウロ之に目をとめ、救わるべき信仰あるを見て、

分かるんだね、その心理状態が。

「あれは本当に自分を棄ててかかっているなぁ」

と。

10大声に『なんじの足にて真直(まっすぐ)に起(た)て』と言いたれば、

キリストも大声ですよ、よく大声でもって。その時、グワーッと御霊の力がその声にかかっているからね。

「なんじの足にて真直に起て」

と、大声で叫んだ。それはもう疑っていたらダメなんだ、やっぱり。魂がこっちに向かっているから、ウワーッと入ってくる。そうしたらば、

かれ躍り上りて歩めり。

と。あの時と同じだ、ペテロの場合と。あの時も躍り上がった。力が加わるから。

今の若い人が、そういう魂の角度で受けようとしているのが、本当に少ないね。感激性がないから。どうしてこんなことになっちゃったかね。間違った民主主義からそういうことになった。先生方がダメなんだ、要するに。若い人がダメなんじゃない。小学校から先生方がダメなんだ。私は詩の中にもはっきり書いているよ、

「教育者は宗教心を持たなければ本当の教育はできない」

ということを。そんなことはゲーテの『ファウスト』の中にも、ダンテの『神曲』の中にも書いてない。

日本では、

「学校では一定の宗教はダメだ」

と公立で言っているが――それはまぁ、一定の宗教で伝道したら、ゴタゴタになるから、それは分かるけれども――教育者自身がおよそ宗教心を持たなかったら、本当のことが語れない。また、力が入らないです。

ここのパウロのところは、9～10節は凄いんだ。あなた方も、もちろん深く祈って、

「よし、あれは受けとりそうだ」

と思ったら、やってください。誰でも聖霊は働くんだから。キリスト自身も、

「私は何もできない。神さまがさしているんだ」

と言っているんだから。

●御利益信仰ではないぞ

11 **群衆、パウロの為しことを見て声を揚げ、ルカオニヤの国語（くにことば）にて『神たち人の形をかりて我らに降（くだ）り給えり』と言い、**

いろんな方言があるからね。パウロとバルナバのことを「神たち」ときたもんだ。

「人の形をしてやって来た」

と。パウロはこの言葉をよく分からなかったらしいんだよな。

12 **バルナバをゼウスと称え、パウロを宗（むね）と語る人なる故にヘルメスと称う。**

「ゼウス」というのはギリシャ神話に出てくる一番最高の神さまだ。なぜ、バルナバの方が、というと、バルナバは黙っているから、パウロは語っているでしょ。だから、語る方が黙っている人の気持を告げていて、パウロの方が弟子くらいに思ったんだ。だから、パウロは「ヘルメス」という。これは正にゼウスのお使いだからね。そういって、

「あっちはゼウスで、こっちはヘルメスだ」

なんて言ってね。何を言っているんだか分からないものだから、パウロはしばらくそうやっていた。

13 **而して町の外なるゼウスの宮の祭司、数匹の牛と花飾とを門の前に携えきたりて群衆とともに犠牲を献げんとせり。**

バルナバとパウロに、これは神さまの化身だから、現人神（あらひとがみ）だから、これに献げなくてはと。それだから、「何をするか」というわけで、

14 **使徒たち、即ちバルナバとパウロと之を聞きて己が衣をさき群衆のなかに馳（は）せ入り、**

とんでもない話だといって、衣を裂くんだ。頭に灰をかぶったり。

15 **呼ばわりて言う『人々よ、なんぞかかる事をなすか、我らも汝らと同じ情を有（も）てる人なり、**

ちっとも変わりないんだと。

汝らに福音を宣（の）べてかかる虚（むな）しき者より離れ、天と地と海とその中にある有らゆる物とを造り給いし活ける神に帰らしめんと為（す）るなり。

「神に立ち帰れ。御利益信仰だと思われてしまっては冗談じゃないぞ」と。「不思議と著しい事」をやると、受ける方では、ヘタすると御利益なんだよな。「大変、御利益がある」と。

「御利益じゃない。神さまの栄光がそこに現れているから、神に立ち帰れ」と。神さまの「不思議と徴」、だから、不思議の元であり徴の元である神に立ち帰らなければ、徴と不思議を現されても、徴と不思議に躓くんだ。

「ユダヤ人は徴に躓く」

というのは、そのことなんだ。

「ギリシヤ人はそれを愚かなものとする」

と、知識の上からね、知的な判断から。どっちもダメだ。

だから、神に帰れと。私たちはキリスト自身に帰る。それは神さまの出店（でみせ）だからね、キリストに帰ることは神に帰ること同じことだから。

「言葉の源泉、業の源泉に帰れ」

ということだ。「帰れ」というのは、そこに「立ち向かえ」ということですよ。同じ言葉です、「行く」ということと。

「向きを変えてそっちに行く」

という字なんです、この「帰る」という字は。転向する、向きを変えるということ。

「私たちじゃないぞ、私たちは人間で同じことだ。私たちを通して働きたもうた神さまに行け」

ということ。だから、この15節は非常に大事です。時々、こういうことをパウロは言って

いるわけです。まぁ、しょっちゅう言っていたんだろうね、恐らく。どの伝道も全部書いてあるわけじゃないから。だから、本ものを受けとるには大変だよ、苦労するよ、本当の伝道は。インチキなのがたくさんいるからね。

●みんな上から来ている

キリスト教神学の方でいっても、神学やいろんなそういった研究で、一生懸命で神の事態を説明するんだよな。あるいは、こうだああだと言って、理論づけたり、組織化したり、そんなことは皆本当はダメだよということ。これもゲーテの言葉ですよ。

「本ものというものは自分で体験するまでは分からないし、体験したことは口では本当は言えない。それを解説したら、それはもうズレてしまう」

と。だから、本当は全部、告白なんです。説明じゃない。ゲーテの文学は、

「全部、私の文学は告白です」

ということ。さすがは違うよ。日本の一流の文豪といったって、ケタが違うですよ、ゲーテというひとは。ゲーテだの、ドストエフスキーだの、ユーゴなんていうご連中は、やっぱり、みんな源泉から、神・キリストから来ているから。音楽だって、そうですよ。ベートーベンでも、バッハでも、みんな上から来ているからね。だから、何といっても、本当の意味における高次な宗教が土台になってないようなことは全部、枝葉なんです、あるいはウソッパチ。

こないだ、私は長野で東山魁夷の作品を観たんだけれども、あの人も神秘的な角度をもっているね。だから、彼の絵が凄いんだよ、やっぱり。非常に神秘性をもっている。

「神秘」というのははいい言葉だね。神の秘かなるところの、神の秘密。この神秘を無教会は嫌ったんです、ミスティック、ミスティッシュなものを。ミスティーク。シュヴァイツァーが『パウロ』という素晴らしい本を書いた。その第一行に、

「パウロは神秘家である」

"Paulus war ein Mystiker."

と言っている。最初の言葉ですよ。

だから、無教会はダメだ、いつまでたっても、もう理屈の世界で。何も無教会の悪口を言ったってしょうがないけれどもね。だから、もう年をとると、しまいに信仰がくたびれてしまって、力がなくなる。内村先生といえども、ちょっと晩年は力がなくなってきたな。先生は素晴らしいひとだけれどもね。それはもう、普通の人とはケタが違うです、内村鑑三は。内村鑑三と賀川豊彦は、型が全然違う。全然違うが、キリスト教界の二大人物だね。

●霊的要素と自然現象

16 **過ぎし時代には神、すべての国人の己が道々を歩むに任せ給いしかど、**17**ま**

た自己を証し給わざりし事なし。

だけれども、何らかの意味においては、証されていたんだと。そういうところは、非常にパウロは広いですよ、気持が。ロマ書1章にも、同じような事を言っている。

即ち善き事をなし、天より雨を賜い、豊穣（みのり）の時をあたえ、食物と歓喜とをもて汝らの心を満ち足らわせ給いしなり』

あれは全部、神さまの恵みなんだぞと。

私はしょっちゅうゲーテのことを出すけれども、ゲーテが、

「自然を観て、その背後に霊的なものを本当に感じなかったら、本当は自然を観ているのではない」

と言っているんだ。そんなことを言うやつはいないんだ、日本の詩人の中に。霊的要素と自然現象とは別々ではないんだと。だから、ゲーテは、神・大自然というものと自分とが溶けているんです、魂が。この自然は単なる物質ではない。単なる物理界じゃないです。彼は自然の観察もよくしましたよ。まぁ何といってもね、ドイツの第一人者、世界的人物だね、このゲーテというひとは。彼のものを読めば読むほど驚嘆する。私はその点でドイツ語をやって良かったと思っている。

パウロというひとは非常に強烈な人格でありながら、非常にまた優しい面と幅を持っている。驚くべき人物だ、このパウロというひとは。キリストぬきには、パウロにかなうやつはいないよ。手紙をみたって、そうでしょ。大自然みたいです、彼自身が。その点ではゲーテと通じている。ゲーテとパウロとは、随分違う面もあるけれども、しかし、その幅は、

「へぇー、不思議だなぁ」

と。だから、また、ゲーテがこの使徒たちのことが分かるんですよ。ドイツ文学のやつはそんなことを分かっていないんです、ゲーテのそういう構造が。ゲーテ研究はたくさんあるけれども、彼らは本当の意味で宗教の世界を持たないから、ダメなんだ、いくらやったって。大体、大学の教授が聖書をよく読まないんだもの。もぅ、情けなくなる。

●パウロは石撃ちにあう

それで、やっと犠牲を献げんとするのを止めたと。

18 **斯く言いて辛うじて群衆の己らに犠牲を献げんとするを止（とど）めたり。**

19 **然るに数人のユダヤ人、アンテオケ及びイコニオムより来り、群衆を勧（すす）め、而してパウロを石にて撃ち、**

危ないんだ、これは。ステパノみたいにやられそうになった。

既に死にたりと思いて町の外に曳（ひ）き出せり。

だから、本当に仮死状態になっちゃった。

20 **弟子たち之を立囲みいたるに、パウロ起きて町に入る。明くる日バルナバ**

と共にデルベに出で往き、21その町に福音を宣伝え、多くの人を弟子として後、

だから、私は今日は「生命がけ」と書いたんだ。パウロはそれでまたデルベでやっている。アンテオケとイコニオムからやって来たんだから、悪い野郎だな。パウロが通ってきた、前のアンテオケとイコニオムからデルベへやって来て、とうとうパウロを石で撃った。けれども、彼はここでもってまた伝道した。また、ここの所をずっと帰って行くんですよ。だから、コリント後書の11章に、

「こんなに私は艱難に遭ったけれども……」

と言っている。普通の人なら皆たおれてしまっているよ。それくらい烈々とキリストの力で生きていたんだ、パウロという人は。だから、新約聖書は、万巻の書が滅びても、新約聖書は滅びない。仏教にどんなに経典があったって、新約聖書のこの力にはかなわないです。大変なもんだよ、この新約聖書というのは。ムダがないです、福音書から黙示録に至るまで本当にムダがないね。その点では旧約とは違う。旧約は、分量は三倍もあるけれども。

だから、聖書は正に神の本なんです。御霊の、霊の本なんです。決して、考えられた、でっちあげられたようなものではない。いかなる文学も、いかなる哲学も新約聖書一巻にかなわない。そういうんだからね、あなた方、新約聖書というのは。だから、これを読んでいたら、ビリビリ電気を感ずるよ、霊気を感じて読まなければ、読んでいるとは言えやしない。いいですね。

ルステラ、イコニオム、アンテオケに還り、

それで、また、来た所をずっと帰っているわけだ。そして、重ねて言うわけだ、シッカリと。悪い奴が居る所も、一向差し支えない、彼は。そして、受けた連中に、

22弟子たちの心を堅うし信仰に止らんことを勧め、また我らが多くの艱難を歴て神の国に入るべきことを教う。23また教会毎に長老をえらび、断食して祈り、弟子たちを其の信ずる所の主に委ぬ。24斯てピシデヤを経てパンフリヤに到り、25ペルガにて御言を語りて後アタリヤに下り、26彼処より船出して、その成し果てたる務のために神の恵みに委ねられし処なるアンテオケに往けり。27既に到りて教会の人々を集めたれば、神が己らと偕に在して成し給いし凡てのこと並びに信仰の門を異邦人にひらき給いしことを述ぶ。28斯て久しく留まりて弟子たちと偕にいたり。

それで、14章がおしまい。こういうわけで、非常にパウロがいかに生命がけでもって、しかも、それは神の護りをはっきりと信じて、一遍死にかかってもなお立ち上がったというんだから、正に復活したようなものだな。それで、第一回伝道の凄さも、よく分かったわけです。

では、今日はそこまで。